

★お役立ち情報★ NO.59 2018.4

入院から高齢者施設への入居まで ～事例紹介～

首都圏に住む 83 歳の K 雄さんは、60 歳の時に妻を肺がんで亡くしてから、賃貸住宅で自由気ままな一人暮らしをしていました。ある日、大腸ポリープから大量の下血があり緊急入院しました。手術後、約 10 日で退院することになりましたが、元々、糖尿病や高血圧など複数の持病もあり、一人暮らしに限界を感じた K 雄さんは、高齢者施設への入居を希望し、病院で紹介された介護付き有料老人ホームで生活することになりました。要介護度は要支援 2 でした(※)。

K 雄さんには結婚して他県で暮らす一人娘の S 子さんがいます。S 子さんは K 雄さんが緊急入院するとの連絡を受けて急きょ駆けつけました。入院中は K 雄さんが動けないため、何度も行き来して手続きなどを手伝いました。S 子さんが行った手続きや処分についてまとめてみました。

※要支援 2 では特別養護老人ホームなどの介護施設には入居できないため、K 雄さんの場合、医療対応型の介護付き有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅が選択肢となる。

【入院から老人ホームへの入居まで】

S 子さんは、入退院の手続きや手術同意書へのサイン、医療費の支払い、退院後に入居する介護付き有料ホームで入居に関する説明を受けての契約手続き、新たに担当になる病院や薬局での手続きなどを行いました。老人ホームへの入居にあたっては保証人が必要なので、保証人も引き受けました、このほかパジャマや下着も足りないので 2～3 着買い足し、老人ホームの指示でオムツも多めに買いました。

個室にはベッドやカーテン、照明器具は備え付けられていましたが、冷蔵庫、椅子と机、収納ケースなどの老人ホームで暮らすために必要な物は、S 子さんと夫とで運びました。

入居時の保証金は 55 万円。本人に代わって保証金の振込みをし、入居費用や介護費用の銀行口座引き落としの手続きなども行いました。老人ホームで毎月かかる費用は約 22 万円。K 雄さんの年金は 1 ヶ月あたり約 18 万円なので月 4 万円の赤字です。預金を取り崩しながらの生活になりました。預金がなくなったら、保証人である S 子さんが差額を負担することになります。

【その他の手続き・荷物の処分など】

住まいが変わることになるため、住所変更の手続きや住んでいた賃貸住宅や電気・ガス・水道など各種契約の契約解除、荷物の処分を行いました。S 子さん 1 人では手に負えないため、荷物の処分は業者に依頼しました。1DK の部屋の荷物の処分費は 28 万円でした。

【入居後の様子】

K 雄さんが入居した老人ホームは、入居者の平均要介護度 3 です。同じフロアには自分で歩ける人や会話のできる人がほとんどおらず、話し相手は若いヘルパーさんだけです。しかし、夕方に

なるとヘルパーさんの数が減ってしまい、話し相手はいません。

歩行や会話ができるK雄さんは、寂しさを紛らわすため、好きなお菓子を食することが習慣になりました。当然ながら血糖値は上がり主治医や看護師から注意され、気分を害したK雄さんは別の施設へ移りたいとS子さんに言い出しました。

K雄さんは糖尿病を患っているため、以前からインスリン注射が1日3回必要でした。一人暮らしの時には自分で注射を行っていましたが、入院をきっかけに物忘れが増えたこともあり、老人ホームでは看護師さんに注射してもらうようになりました。そのため、K雄さんが入れるのは、看護師さんが常駐している施設に限られますが、そういう施設は多くはありません。

S子さんはK雄さんに合いそうな施設をインターネットなどでやっとな見学にいきましたが、K雄さんの様子を聞いた施設の人から、「医師や看護師の指示を聞かない方は、責任が持てません」と、入居を断られました。条件に合う施設でも断られることがあるのかと、S子さんは驚いてしまいました。

#### 【費用とサービスの関係】

ところで一般的に費用が安い老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅などの高齢者住宅・施設は、要介護度の低い、比較的元気な人に向いています。病院への通院は自己責任で行い、介護サービスは最小限、食事も自炊可能です。良く言えば自由度が高いのですが、要介護度が高くなったり常時医療行為が必要になったりすると、対応できなくなるところも多いのです。

病院と提携し、医師が訪問してくれて、看護師が常駐しているような高齢者住宅・施設は、介護サービスも比較的手厚くなるものの費用は高く、元気な入居者は少ないのが現実です。

K雄さんの受け取っている年金額(月18万円)は決して少ないわけではありません。しかし、医師や看護師が来てくれる施設で、K雄さんの年金だけで毎月の費用を賄うことができる施設は、残念ながら首都圏で見つけることはできませんでした。

このように、退院から入居までK雄さんだけではできないことがたくさんありました。S子さんは以前からK雄さんを心配して、将来のため、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅などを見学してみようと誘ったことがありましたが、その当時は「俺は養老院なんか嫌だ」「誰の世話にもならない」と応じませんでした。

ピンピンコロリを目指していたK雄さんでしたが、気ままに暮らしていて、健康に注意しているとはいえませんでした。現在は居心地が最悪な老人ホームで、「こんなことになると思わなかった。早く死にたい。」と暗い気持ちで過ごしています。動かないから動けなくなる悪循環に陥り、物忘れも加速中です。

人は誰でも歳をとります。動けなくなってから、「まさかこんなことになると思わなかった」と言わないように、健康管理はもちろん、いつかは他人のお世話になるということを認識し、介護が必要になったときどこで暮らしてゆきたいか？ 高齢者住宅・施設を考えるなら、何処にどんな施設があるか探して情報を集めるなど、心とお金の準備をしておきましょう。誰でもいつかは「自立の限界」が来るということを覚悟しておきたいものです。